

たけれども、その缶詰の缶に一杯少々あって、それから
お魚というのは、生魚はほとんど食べられないという。
ギューギューという小魚と、野菜については、キャベツ
とかバレイショというようなある程度限られている食事
でございました。ウラジオストックで初めてトマトと
キュウリを見ましたんですけれども、それは日本と逆で
ありまして、トマトは赤いよりか青いトマトを食べてい
た。キュウリはまた逆で黄色なキュウリを食べて、漬け
物にして、ものすごく酸っぱいということが記憶にある
んです。

それから、先ほど作業のことでちょっと思い出したん
ですけれども、零下四十度になれば作業中止をするとい
うことで、五、六回はあったんですけれども、そんなに
そう多くはないです。そういう配慮があったわけですけ
れども、ほとんど強制労働といっても言い過ぎでないと
私は思っているわけです。

それからあとは大体そんなことで、二十二年十一月に
私は帰ってきましたんですけれども、私が帰った日か
ら、当時鉄道省とはいっていただけなんですけれども、私も鉄

道省の方では十九年三月に現役で入隊するときには、休
職として扱うということだったんですけれども、それか
ら一回帰ってきましたて、一か月休養しまして復職でき
たわけですけれども、向こうへ行っていてやっぱり非常に
復職が遅かったために、給与的にも待遇的にも非常に損
をしているわけです。復職できましたけれども、任官が
非常に遅かったわけです。それから、給与が非常にひど
くて、調整する機会も二、三回あったんですけれども、
その資格対象者を一番低い人をもってこられたために、
私が同僚よりも非常に低かったということで非常に損を
しているわけです。そういったこともまた抑留生活が災
いしていたということがいえるんじゃないかと思うん
です。

抑留を支えた左官屋の特技

熊本県 河津 太

—— 今から聞き取りを始めます。それでは、入隊か

ら終戦までの状況などを話してください。

私は学校を出て、それから就職して北朝鮮の方に出ました。あそこで繰り上げ検査がございましたので、荷物をそこに置いて、一応郷里で兵隊の検査を受けよいうことで帰郷いたしました。熊本県阿蘇で身体検査を受け、十九年十月十六日に熊本の一八部隊に入隊しました。一八に一晚泊まりまして、それから冬の軍服をいただいたので、これは南方回りではないということで内緒にはしていたところ、おまえたちはハイラル要員だということ、軍用列車に乗りまして門司で一泊したんですが、門司から朝鮮に渡り、それからどんどん行ってハイラルに来たのが十月の終わり。もうハイラルでは霧下十度ぐらいかな、十月の終わりでもございました。いた当時は地下たびやったので初めての寒さに出会ったものだから、連れにきた引率の下士官の方が、足踏みせいということでどんどん足踏みました。

入隊してびっくりしたのは、寒いものだから、ペーチカに手を暖めようとしても何も入ってなくて、それでこれはえらいところに来たなということではびっくりしまし

た。ハイラルは当初は歩兵ではいいんですが、あそこで満州第六八中隊という部隊に編成替えをされて、それから幹部候補生を志願しまして、教育を受け、幹部候補生の伍長を命じられたときに、ほとんど留守部隊は興安嶺の陣地構築に出たものだから、留守の班長を兼ねて、地元から入りました義勇隊の開拓団の初年兵を教育しながら士官学校に行くために勉強しておって、十九年七月にハルビンのちょっと東にございます阿城というところの関東軍の歩兵下士官候補者隊というのがありまして、そこに予備士官候補生として分遣、教育のために行きました。

そこで、勉強しているときに、もう八月十五日になりました、十三日には国境が厳しくなって、もうソ連が入ってくるぞという情報がありました。私たちは関東軍の歩兵の予備士官だったものだから、全部車両とか火器を持って、それから、そのときの情報ではもうハイラルからどんどん入ってくる東満州地区の牡丹江からはほとんどソ連が入ってくるということで、もうこれはどうしたらいいかということ、一応ハルビンに出て、ハルビ

ンで一応ソ連と決戦しようじゃないかという上部からの指令がございました。そこでやられたところ、あまりにもソ連軍の侵攻が激しいから、これではとめきれぬというので、ホウテンレイまで行って何かせねばしないぞということで、ハルビンの駅で重火器を全部車両に積みました。南下しようとしたときに、一応ハルビンの駅で命令を受けましたので、何ごとかということでハルビンの宿舎に帰ってみたところ、ラジオで終戦の玉音を聞いたんです。

そこで、戦争をやる気の激しい連中が、終戦ということで、もう自分で自分の引き金を指で引いて自殺をした者もかなり出ましたけれども、我々はまだ戦争というものにあまりなれていないものだから、今後どうなるかわからないけれども、流れるにまかせたわけです。そこで一応四、五日たちました。四、五日ハルビンでどうなるものかと思って待機しながら、一応ハルビンの飛行場へ集まれということで、私たちの部隊は全部ハルビンの飛行場へ行きました。そこで、ソ連の武装解除があつて、ハルビンの飛行場から原隊までまた駅へ向かつて歩いて

帰りました。原隊へ帰ったところ、満人が部隊内を荒らして、もう何もかも持っていかれてしまつて、敷布の中に泥草が散らかっているような状況でございました。そこで何日か過ごしたんですが、そこでいよいよソ連が入ってきました、おまえたちは今から日本へ連れて帰る、持てるだけの食糧は持てということで、貨車へいっぱい食糧とか砂糖なんか積んでいた。東満行きの列車で引っ張られていったけれども、その間もダモイ、ダモイということで、もう帰る。ところが、行けど行けど、帰るとじゃなくて、引っ張られていったんです。

途中に一面波というところに一週間ばかり野宿をしているうちに列車が通るということで、一面波から汽車に乗りました。それから、横道河子というところから汽車に乗って、ところがそれから先は汽車が行かんで、横道河子で暗闇の中におろされたんです。それからしようがないから、手探りで川の水みたいなので飯ごう炊さんをし、そこで寝たんです。それも雨がザアザア降る中に、体も疲れているけれども、今になってみると、こういう格好で寝れるものだなと、こういうようなところに寝た

んです。翌日起きてみたらびっくりしたんですが、この川のふちはみんな死んだ兵隊の死骸だらけ。馬も死んでいる、人間も死んでいる。こんなところでよく飯を炊いて食べたものだなと翌日びっくりしたもんです。何のことはなくて、それからまた行軍が始まったんです。

その途中、行軍が始まって、満蒙の開拓団の一人が、それは私の記憶にもあるんですが、兵隊さん、兵隊さん一緒に連れていってくれということで、連れていきまして。それからまた子供が泣きついて兵隊さん、兵隊さん連れていってくれというものだから、しょうがなく連れていきよったところが、虎林というところがございすが、虎林に日本人の婦女子の収容所がある。そこへ引っ張られていきよったのでその子供を日本の婦女子の収容所へ押し込みました。恐らくその子供は何らかの形で帰ってるんじゃないか。今になってみると、ああいう、何十年で満州にいて大きくなられて、その辺の中国人に育てられて、今帰ってくる。毎年聞き取り調査が行なわれているんですが、早く帰っておればいいがなという思い出があります。

そして、十月の終わり方に牡丹江に着いた。牡丹江でいよいよソ連の編成替えを受けて、労働大隊として結成するために身体検査があった。そのとき、私は学生時代に肋膜炎をやっていたものだから、兵隊は第三種で、よくこれで兵隊にこれたなという体じゃったんですが、あの当時は兵隊に行かんともうかたわ者といわれたものだから兵隊に行かなきゃいかんという気持ちで、無理していた。そういう関係で、体が悪いから、おまえはこのままソ連に行ったってそのまま死んでしまう。そういう状況ではいかんから、ここに残れということで、運がよくて牡丹江に残りまして、終戦の翌年の二十年五月まで牡丹江の病院にいて、衛生の班長をやらしてもらい、終戦当時、山を逃げ回って食う物を食わん連中が編成において、早くソ連に引っ張られていった連中が、国境近くの労働大隊が多かったと思うんですが、もうやせこけて。その牡丹江まで帰ってくるんですが、一応ソ連に入った方を体回復のために休ませるんですが、あまりにも終戦後ひどかったものだから、ほとんどの兵隊さんが栄養失調になっているわけです。それで、毎朝人員点呼する

と、五人、十人ぐらいはもう毎朝死んでいきよる。寒いものだから、すぐ白くなってしまふ。骨と皮になってしまっているし、それを死体室にたくさん積んでおく。雪解けを待って、死んだ兵隊さんの死骸は、戦友がそりに乗せて、どこかほかのところに持って行って埋めたんです。が、今、結局、その戦友の名前も記憶ないです。恐らくそのときの名簿もどうなったかわからないけれども、日本人の戦友というのは、一べんソ連に行つて帰つてきたし、だから、そういうのを繰り返し繰り返し、翌年の五月まで行われたんです。その間、私は牡丹江の町に買い出しにいつて、キャベツとかカボチャ、野菜なんか買ひ出して、それから馬をたくさん牡丹江で持っていたもので、毎日一頭ずつ殺して、栄養のために、みんなに馬の肉とか何かを配給して、二十年五月に初めて、なるたけ体のいいのが二千人の単位で綏芬河を越えて、ソ連に入つた。

二十五年五月、何日かわからないけれども、雪も解けて、五月に出て二十何日間かかりました。東ヨーロッパの方に、スベルドロフクスといつて名古屋ぐらゐの町で

す。その収容所に作業大隊として送られていった。そのときの編成は二千人で、ウラル山脈の向こうのスベルドロフスクという町に入るとタイヤの電車ですけれども、そういうのが走るような町です。収容所はその町の中の工場の近くで、それは殺風景なところで、そこに板で囲つた囲いの中の上と下に寝台をつくつた木造のお粗末な収容所に入つて、そこは二千人は収容しきれないものだから、分遣に五百人、五百人といつて、その近くのそういう収容所にそこで分かれしました。私はスベルドロフスクの大体一番多い収容所の方に。

私は事務上がりなものだから、何も手に職を持てなかつたものだから、雑役に回されて、何でもしておつたです。ところが、夏のうちはよかつたんですけれども、冬になったら寒さが激しいもので、それに食い物が足らんものだから、一メートル穴を掘るのに三十センチもやつとコツンコツンやつて、ツルハシとスコップで硬い石も泥も凍つたやつを掘るわけですが、三十センチもよう掘つたらもう日が暮れてくるんです。それから、足は凍るわ、凍傷にかかることあるわ、手は冷たいわ。また

翌日も掘ると思うと、掘ってもまた凍っているものだから、これは死んでしまうわいと思って。それから、何かこれはほかの仕事に変わらなきゃいかんと思って、そこで私は左官屋を希望しました。左官屋は、夏は外の壁を塗る。冬は部屋の中で火をたいてから中の壁を塗るです。これはいいわいと思って、それから左官屋をしたことがないばってんしてみろと。ソ連の監督に、ひとつ左官屋になりたいからと言ったら、おまえしきるかという。しきるかしきらんかわからんけれども、してみろということ、左官屋を始めたんです。こういう左官屋というのが、練った原料を柄のついたおわんみたいなので、だんごにしてポンポンと壁にだんごをつくるような格好で、すくっちゃなで、すくっちゃなでして、反動を利用して壁にだんごをくつつけて、そのだんごを長いことで上、下に伸ばしていくんです。だんごのひつつけ方が一流左官屋ではないわけだから、それをやってみたところなかなかうまくだんごがひつつかんです。それで、雑役の早く終わったときなんか、もう何回も何回もそれを練習して、そしてだんごが壁につくようになったもん

じゃから、それからまた監督のところに行って、もう一ぺん見てくれ、こうやればつくんだから、これでいいかということと言ったら、監督もだんごをこれだけつければいいから伸ばせと言って、こうして伸ばしたらうまく壁にひついて、そのついたやつを伸ばすものだから、これなら左官屋やってということで、左官屋を始めた。左官屋を始めて本当に助かったんです。

そのときに、私は幹部候補生上がりやったものだから、帰ってからすぐ共産主義者にしようということで、私たちを青年行動隊として別のグループに押し込んでしまわれ、そこで社会主義の勉強を片手に仕事をしようということだったんです。私はそういう左官の仕事覚えたものだから、左官の組をつくりました。そして、幹部候補生の若手の元気のいいのを十二人で組をつくりまして、そして我々も年とった兵隊さんと違う、やっぱ若い二十歳そこそこの連中だもんだから、もう一〇〇%、いつも一六〇から一七〇%あげよったわけです。それで、そこでもおまえたちはよう頑張るということで、みんなの前で表彰されたことがあります。それで、大きな

将校のアパートづくり、二階建てのかなり大きいアパートの建築の左官屋、れんが積みから、ちょうど私たちが抑留されている間に、そういう大きなアパートが一つ完成しました。食糧は、最初は量がなかったわけですが、そして、エンドウが配給になったら、エンドウが一月も二か月も続くわけです。それも飯ごうの中に五粒もいってたら上等ですが、スープは塩汁、黒パンの小さいのが何グラムかくるわけです。もう大体三食分を一ぺんに食わなきゃあもう食うたことはないわけです。それでもう一ぺんに食ってしまくと、昼も晩もないわけです。朝食うたら、もう昼も晩も食うものがない。冬は特に。夏は草が生え、馬の食うものは何でも食われるというので草は何でもとって煮て食いよったです。それにあとは、岩塩というのはどれだけでもあったもんだから、岩塩で煮て味つけてから食うもんだから、当時は体がみんなはれてしもうて使えものにならなくなってしもうて、もう食い物が無いばかりに。本当に仕事はしろ、仕事はしろ言う。食うものは少ないわ。それで私たちもストライキをかなりして、もう座り込んで厳しい抗議をした。ところが、

モスクワが近いものだから、やっぱり国の上の方に少し聞こえたんでしょう。食糧事情が少しづつは緩和されてきたんです。それもやっと向こうに行って一年過ぎてからです。二十二年中ごろからやっと、それも満足するものではなかったですが、少しはよくなったような感じがします。

さっきもお話したように、もう冬の仕事なんか凍るものですから、それでもう外部の仕事も大変だったですが、恐らく零下四十度から四十五度ぐらいまで下がるんです。その寒さというよりか、痛いんです。あちらの寒さは寒さを通り越して、もう体にジカジカ当たって痛い。鼻がむずがゆいなと思ったときは、もう鼻は凍傷。それは物すごい寒いところだな。今の内地の方にその寒さの話をしたじゃ、痛いと言ったって恐らく理解されないような寒さ。

一番寒いのはそういうことですが、便所の話、その使役というのが何人か出る。大便と小便が凍ってどんどん上がっていくもんだから、それを割って捨てに行った連中の服の中に大便の悪いのがはいって来ている。帰って

くると、ベーチカでそれが解けて、ジワジワ食事しよつとるときに臭うわけや。凍っている。帰ってきて一時間ぐらいいしたら、大便の氷が解けて臭うて、臭うて、冬はもうつらかったです。

収容所では、若い兵隊さんと年とった兵隊さんといういろ分けて、作業班を編成したんですが、我々は若いものだから、仕事場から帰ったら、共産主義の勉強、社会主義の勉強です。年とった兵隊さんは、共産党を勉強しよるがなかなかついてこれない。そういう格好で編成されたんです。それで、作業班をつくるのにもそういう作業班でやっただけなんですけれども、夜間作業なんかがもうとっくにあるわけです。そのときには、もう各左官屋の班、それから軽作業の班、それから穴掘り、それから野菜づくりとか、いろんな方向に使役に出ていく班があるんですが、その班から何人ずつ出してくれということで、きょうは連絡がはいったから夜間作業にみんな行っておろしてくれということで、ちよいちよいそういう仕事があるんで借り出されたんです。私が班長を命じられまして、一度五十人ばかり連れて、れんがおろしの夜間作業

に行っただんですが、そのときに、声がかかったものだから、そのときに警戒兵と約束して、今から臨時作業の夜間作業に行くから、今から仕事に行っただけはどんなに早く終わってもあした一日休ませてくれという約束をして行ったことがあります。そのとき、私も若かったものだから、ソ連警戒兵と約束したから、れんがおろしたらもういつでも休んでいいし、あしたも休んでいいという約束ができたから、ひとつきょうは頑張ってくれんかということで、警戒兵に引っ張られてから夜間のれんがおろしに行っただんです。したところ、早く終わってあしたも休めるということで、一たん仕事に行っただけがれんがおろしにかかったんですが、もう時の間におろしてしまっただです。中を見たらからっぽですから、警戒兵にみんなおろしてしもうた、もう帰るぞということで帰っていったです。

帰って休んでいたら、ケンスリをはめた将校連中がいきり立って収容所に来たんです。夕べの引率者はだれかということで、夜間使役した夕べの引率者はおれだ。したら、ちょっとこいということで、それから、何のこ

とかなと思っていたら、貨車の着いているところへ一ぺん行ってみようじゃないかということで、私は警戒兵とケンスリのついたやかましい将校について、貨車の着いた現場に行ったところ、早ようおろしたら休ませるという条件だったものだから、貨車の中かられんがを外へ投げ出してしまっているわけです。それで、話を聞くと、抱え出して外に積みということだったらしいです。私もそこまで知らん。早よう終わったら、翌日は寝させるというものだから、兵隊さんもみんな使役されんと喜んで貨車の中から投げ出しているものだから、そこでれんががとっちらかっているわけな。おまえはソ連の敵だということ、即、営倉に入れる。それから、私は営倉に入らにゃいけんもんだから営倉に入った。行った連中が、日本人というのはありがたいんですよ、班長さんが私たちのために犠牲になって営倉に行ってはかわいそうということ、足を巻く布のきれみいたいのを貸してくれるわ、何やらして、営倉にぶち込まれたです。そういうような夜間作業がしょっちゅうありました。

それから、コルホーズに仕事に行った連中は喜んでき

よったです。ジャガイモ植えとか、ジャガイモの種とか、ちょっとちよろまかして生でもかじれるから。コルホーズの仕事に使役に行った連中は喜んで行きよるという状態ですけれども、私たちはほとんど建築の左官の方じゃったから、ほとんど家の中と外じゃったです。そういうふうにして目をつけたものだから、将校から声がかかるわけです。ちよっとうちの壁が、ペーチカが割れて、来てやってくれんかと引っ張り出すもんで、引っ張り出されると、将校の家庭に行く。家庭に行けば、個人的にはとてもいい人ですな。行ったときは、パンをよばれるわ、スープはよばれるわして、その点は特技を持っているものだから、作業の面で大分業をしました。

それからグリコンという農場に移動させられ、グリコンに着いたら、すぐそのラーゲルの中で整列させられて、ラーゲルの中にソ連の将校の人が来て、「日本の兵隊さん、よく働けば、やがて日本に帰ることもできるでしょう。よく働けば、やがて通信もできるようになることでしょう」というような、何とも私たちの気が遠くなるような演説を聞いたことも覚えております。「日本の

兵隊さん、ここから日本までは何万キロという道のりだから、まして零下六十度から以上下がるこのシベリアで逃亡などしたら命はありませんので、絶対に逃亡はしないように」というような説明も聞きました。もうこれは自分たちはえらいことになったということで、みんなで気は沈んでしまつて、その説明が終わつて各部屋の割り当てがあつて、そこにおさまつたわけなんですけれども、私たちは運よくサガミ隊長、今舞鶴にキンチャク船の親方のところに漁師にはいつておられる方なんです。

今はクラウチジロウと言います。入ソ当時はサガミジロウだったんですけれども、サガミ少尉が非常に温厚な方で、お人好しの方で、私たちの作業現場でも凍傷にならないように、元気でみんなこぞつて一人残らず欠員がないように、日本に帰れるようにと心尽くしをさせていただいて、私が大腸カタルで血便したときも、町のたきものの粉炭で下痢どめをつくつていただいて、薬も何もないので、粉炭をつくつていただき、貴重な米でおも湯をつくつていただいて命拾いをしたことも覚えています。

そこで、やがて一年半ほどして、サガミ隊長以下百数

十人の人は第二十七ラーゲルの方に移動することになつて、私たちを残して移動していったのです。その第二十七ラーゲルというところは鉄道建設の部隊で、その方々が非常に苦勞したと。食物も鉄道部隊では夏は野草を食べるといふこともあるけれども、冬になると凍土の中に草も何一つない。ただ配給のみに頼つて、栄養失調でどんどん死んでいった。熊本県の人で坂井ユキヒロという人も、今は一緒に戦友会をやっているんですけれども、本田という人もいます。この二人の人は陸軍士官候補生です。いろいろ苦勞話をしておりますが、その人が第二十七ラーゲルに行つてからの苦勞は、私に戦友会のときに話してくれました。私たちは、農場に残つて運がよかつたと思います。一番最初に入ソした当時も農場におつて、ジャガイモの作づけ、麦の作づけ、麦の脱穀、ガロウというのはエンドウ豆ですけれども、エンドウ豆と燕麦を一緒につくつて、豆の手のいらぬ、豆の手をせずに、燕麦を豆の手にしてエンドウ豆をつくるんです。その脱穀、あるいは麦の脱穀、ジャガイモの收穫というように、收穫と作づけのときは、腹いっぱい食べたことを覚

えています。コルホーズのグリコンというところにいて、私たちは運がよかったと思います。

帰る前までグリコンにもおりましたんですけれども、それからやがて二年までは銃剣つきで、四方には日本の刑務所と同じように棲があって、高いところの塔から零下六十度も七十度もある夜の夜中もソ連の兵隊がサーチライトをつけて、私たちの逃亡を銃剣つきで監視しておった。二年間は監視つきであつたわけです。作業に行くとともに銃剣つきで行つたわけですけれども、やがて二年過ぎたら、日本人が正直で、逃亡もしなければ、暴動も起こさないということで、銃剣つきで仕事に行きよつたのも解放され、棲の上で監視されたラーゲルも自由に出入りができるようになつたわけです。

それから、民主教育が始まり、ソ連の政治部員がソ連の共産党紙、日本の共産党紙を持ち込んできて、翻訳した日本の共産党紙を一人々々に渡して、ずうっと教育が始まつたわけです。それからやがて二十歳前後の者を特別教育ということで、一つのラーゲルに集めて教育をしたわけです。

その教育が終わつて、私たちがまたもとのグリコンのラーゲルに帰つて、それからやがて来ていたら、ヤボンスケ、ダモイということで、装具を持ってということで、装具を集めてトラックに乗つた。どこに行くのかと思つていたら、汽車で帰るんだと思つていたら、違うラーゲルに連れていかれて、山から石灰岩を掘るところとか、石灰岩を掘り出して、苦土の中に石灰岩を入れて、一週間ほど焼き続けて、燃やし続けて、真っ赤になつた石灰岩が今度は生石灰になつたやつを冷やして、釜から出して貨車詰めをしたり、今度はまただまされて、ヤボンスケ、ダモイ、まただまされて、今度連れていかれたところは、ダモイじゃなくて、鉄道の枕木を製材するところに連れていかれて、枕木を担がされて、枕木を積み貨車に載せたりおろしたり、それをクレオソートの釜の中に、蒸気で蒸すところの釜の中に入れるために、貨車に積み込んでしまつたら、今度はクレオソートで染まつた枕木をまたおろして、広場のところに積み込んで、その枕木が約二メートル弱ぐらい、シベリア鉄道の線路の鉄間距離は、私が一メートル六十八あるんですけれども、

私が寝ころんで足首と枕にしていまいぐらいに鉄間距離は広いんですから、枕木もそれ相当に二メートルぐらいあるわけです。それを松の木の生木を重いのに担いで、広場に積んだり、貨車に積み込んだり、また蒸したやつをおろしたり積んだりさせられたことも覚えています。

それからやがて数日間たったたら、今度は、鉄道に敷く砂利だったろうと思うんですけれども、砂利の積みおろしをさせられたことも覚えています。それから、それが済むと、やがて今度はダモイということで、五、六回、ダモイをだまされながら、今度のダモイはうそでなからうということ、タイセットに集められたわけです。タイセットに行ったときに、タイセットで坂井軍医と松本曹長が、ちょうど私たちのグリコンでサガミ隊長以下百数十人が二十七ラーゲルに行ったあとに私たちは残されたわけなんですけれども、サガミ隊長のあとに、私たちの隊長に坂井軍医と松本曹長がおいでになったわけです。その人たちも途中で別れたのか一緒に行ったのか、それはわからないのですけれども、タイセットのところではまた一緒になったわけです。タイセットで、兵隊から

松本曹長と坂井軍医はつるし上げをくらったわけです。

そこで、数日間してから、やがて日を経て、またヤボンスケ、ダモイということで貨車に乗せられて、今度は西から東に、日の出る方に貨車が走ったんです。これで本当に帰るんだということで、数日間、また昔のような二段の貨車、両方で四十人乗り込む。昔と同じ有蓋車に乗って、今度はナホトカに着いたわけです。ナホトカで、これで帰られるんだなあとということで。

しかし、そこでいろんなうわさを聞き、またいろんな日本からの情報が入ってくるわけですけれども、その情報の伝達が各グループごとに入ってくるわけなんです。私たちの乗って帰ってきた信洋丸の船長のつるし上げ事件も聞きました。

そういうことで、ナホトカで民主教育、ソ連の共産党の教育が盛んに。その教育を受けなければ、また自分から率先して反デモクラシーであればもう帰さないということで、一生懸命団結をする歌を歌ったり、赤旗の歌を歌ったり、ワルシャワの労働歌を歌ったりしていたわけですけれども、やがて私たちも帰国だと、名前を呼び出

されて、胸をなでおろしたわけなんです。岸壁に私たちを乗せていく信洋丸が横づけされている。私たちは整列させられて、名前を呼び出されて、団結の歌を、「腕を組んで行こうぜ、おお、みんなで腕組んで」と言って、大きな声で団結の歌を歌いながら船を見上げて、ナホトカの港はちょうど満潮になっておったので、陸すれすれに喫水線が上がっていた。大きな信洋丸を上向きにながめながら、日の丸の旗が船に上がっているのを懐かしく。要領よくやっていないと、またシベリアの方に送り返されたら大ごとだからということで、タラップをしっかりと踏みしめながら、手すりをしっかりと握って上がっていったのです。

そのとき、船の上で、船員さんたちが「ご苦労さんでした」ということで、船員さんたちに迎えられて船に乗って、各自、信洋丸は運搬船ですから、二千人ぐらい収容されていたわけなんですけれども、貨物を乗せる所になると、ずうっと横の方に、真ん中はずうっと吹き抜けになっていて、横の方はずうっと棚になっていて、その棚にずうっと五段か幾らかあったと思うんですけれど

も、兵隊が乗ってしまったわけです。二千人ぐらい乗ったらいいんですけれども、そこでいろいろ弁当の配給があつて、さあ、出発だと船は出港して、船が出ていくときはもう私たちは船底に入っているのです、ナホトカは見る事ができず、さよならしたわけです。懐かしいといえは懐かしい。ソ連の郷土を離れてさよならしたわけですから、一昼夜だったと思います。船の中で一晩泊まったことを覚えています。やがて舞鶴に着いたときに、舞鶴のあの緑に満ちたる日本の郷土が、本当に日本の郷土に帰ってきたんだということで、胸が弾んで、みんな抱き合つて喜んだわけです。

やがて上陸が始まつて、日本の民間の人たちが迎えてくれた。

チグロワヤ伐採隊体験記

熊本県 酒井 国良

多良木町の酒井国良でございます。戦車におびえると